

タイトル：2023 年度 教育セミナー（第 19 回）

日時：2023 年 9 月 21 日（木）～24 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室（303）

「10～11 世紀アンダルス西部におけるアフタス家の台頭および動向」

中川流衣（北海道大学文学院 修士課程 2 年）

結論を先に述べさせていただくと、実に有意義な 4 日間であったという感想に尽きる。中東やイスラームという、日本ではどうしても馴染みの薄い領域に正面から立ち向かう大学院生と知り合えたことは自分にとって実に貴重な経験であった。この先さらに多く、人種国籍あらゆる点で異なる研究者と話す機会が増える筈であるものの、まず自国において中東研究の同期並びに第一人者の先生方とお話する機会を無料で設けていただいた。そのことは私の中で一歩先に進んだ実感を与えるに十分なものであった。私が最もよく会話したのは隣席の武田氏であり、近現代イスラエルの政治と社会を研究している方である（という印象を受けた）。彼女は「セファラッド」という区分（集団）について言及していたが、実はカトリック・スペインによるグラナダ征服後、スペインから逃れたユダヤ教徒はスファルディーム（即ちセファラッド）と呼ばれ、オスマン朝など地中海東部の帝国において活躍する。こうした歴史上の出来事が時代・地域を越えて今日の中東情勢に関連してくることに感動を覚えたことは印象的である。そうした感動も、本セミナーあってこそのものである。

また何より先生方の講義は実に刺激的であり、例えば小倉先生の講義からは小さな「ズレ」「未解決な点」が時代を経ても以前放置されていたり、またはあらぬ方向へ影響を及ぼすことすらしていくという研究そのものの皮肉を感じざるを得なかった。古代や前近代史は極端化され易い（寛容な時代、野蛮な時代、神秘的など）というのが私の印象である。過去と現在を繋がったものと考えれば、各国各地域の現代社会における近代史の安易な否定ないし肯定（前近代史が「利用」されるケース）とそれに続く諍いを防ぐためにも、前近代史における自身の研究の立ち位置と再検討は常に心がけねばならないであろう。勿論それは容易なことではないのだが、今回知り合った多くの院生たち（および今後知り合う研究者たち）の研究に自分の研究が役立てられる「かも」知れないと考えると、そうした作業も何ら苦ではなくなる（寧ろ楽しみですらある）。

また最終日、参加者の研究分野の偏りについての指摘がやや多い印象を受けたが、私自身は寧ろ自分の様な前近代史を専門とする人物が少なく、現代中東政治や社会を扱う方が多くいたことで自身の視野を広げることができたと感じる。但し、もし可能であれば近現代（勿論前近代も）北アフリカや古代アラビア半島など、より広い「中東」の専門家の話も聞いてみたいとは感じる。また来年からはアンダルス史を志す私の後輩も修士課程に入学するとのことで、是非とも本セミナー受講を勧めたいと考えている。（1143 字）